内藤風虎の文学サロン

檀上正孝

一　はじめに

延宝期の江戸俳壇において、内藤風虎をとりまく一つの文学集団―それを一般に「風虎サロン」と呼ぶ―が果した役割は、大きなものであったと評価されている（註1）。ちなみに言う。江戸俳壇の主流をなすものは、この風虎サロンの一団であり、それに対して、従来とかく過大評価された田代松意ら『談林十百韻』の連衆は、あくまで一時的な、底の浅い活動しか、することができなかったのである。

内藤風虎その人についての研究は、すでに岡田利兵衛氏の「内藤風虎」（国語と国文学、昭和三二年四月）や同氏「内藤風虎・内藤露沾」（明治書院版『俳句講座2』、昭和三三年一一月）があり、また風虎サロンについては、今栄蔵氏の「談林俳諧史」（明治書院版『俳句講座1』、昭和三四年七月）などによって、大略の位置づけがなされた。しかし、風虎サロンの果した役割が大きければそれだけ、風虎サロンの実態をより正確に把握し、位置づけることが必要となるであろう。

内藤風虎は、奥州岩城平七万石の城主であった。したがって、生活の本拠は岩城にあった。この城主の感化によって「百人近い家中俳士があった」といわれる。『桜川』（註2）句引によれば、岩城住の作者七十人があり、これに隣接する二本松住の作者四十五人とともに、『桜川』作者群の主要な一部分を形成していることが知られる。「奥州には貞門俳諧が早くから浸透し、磐城平と二本松はその二つの中心地であった。そして風虎は正にその棟梁的存在となったのである。」（註3）

風虎は、また江戸にも邸を構えており、岩城と江戸との間を往復して、藩政に努めていた。江戸の風虎邸にも、俳人たちが集まり、これが江戸俳壇において一派を形成し、次第に勢力をもってくることになる。これが、いわゆる「風虎サロン」である。

従来、風虎サロンの名称で呼ばれるものは、すべてこの江戸の風虎邸での俳諧活動を指している。しかし私は、風虎サロンの範囲を時間的にも空間的にも、もっと拡大してとらえるべきではないかと考えるのである。

すなわち、その一は岩城に本拠をおく前期サロンであり、その二は江戸を舞台とする後期サロンである。この両者を同じ「サロン」ということばで一括することは、あるいは不適当であるかもしれな

い。しかし、いずれも風虎をとりまく文学集団である点においては共通性をもつのであるから、便宜上「サロン」ということばを用いるのである。前期サロンと後期サロンの性質の相違は、後に述べるところによって次第に明らかになるであろう。俳諧史の上から見て重要な役割を演ずるのは、もちろん江戸における後期サロンである。しかし、サロンの語義にふさわしい和やかな文学的雰囲気が育ったのは、岩城における前期サロンであったのではないか。

ともあれ、この小論においては、風虎の俳諧活動に即して次の四つの時期に区分し、サロンの構成メンバーを検討することによって風虎サロンの実態を明らかにしていきたいと思う。

前期 第一期（形成期） 万治二年から寛文六年まで（八年間）
　　第二期（充実期） 寛文七年から延宝二年まで（八年間）
後期 第三期（発展分裂期） 延宝三年から延宝八年まで（六年間）
　　第四期（崩壊期） 天和元年から貞享二年まで（五年間）

時期区分の目安を示せば、次のとおりである。第一期は、風虎の俳諧作品が初出する万治二年から、風虎の第一撰集『夜の錦』成立までの八年間とする。第二期は、『夜の錦』成立後、第二撰集『桜川』成立までの八年間とする。第三期は、西山宗因東下の延宝三年から、松江維舟が没した延宝八年までの六年間とする。第四期は、天和元年以後、風虎が没した貞享二年までの五年間とする。

二　風虎サロンの形成

風虎サロンの第一期は、万治二年から寛文六年まで（風虎四十一歳から四十八歳まで）の八年間とする。この時期の特記すべき事項は、風虎が俳諧を嗜み、維舟・宗因・季吟といった大家と密接な交渉をもつようになったこと、風虎の第一撰集『夜の錦』が成立したこと、などである。

風虎は、万治二年の『御点取俳諧百類集』に、本名の義概（よしひね）をもって入集している。これが風虎の俳諧作品の初出である。翌万治三年刊の松江維舟編『懐子（ふところご）』に「岩城衆」の名で入集するが、同書は「明暦二年三月に着手、三箇月余で完成したという」（俳諧大辞典）から、風虎と維舟の交渉が生じたのは明暦二年以前と推定され、風虎の創作活動は、作品初出の万治二年よりさらに数年さかのぼって考えることが可能となる。

北村季吟との交渉は、寛文元年七月から十二月まで半年間の『季吟日記』（註4）中に、風虎に関する記事が五箇所あることによって明らかであり、とくに七月十二日の記事はよく知られている。

十二日　けふ奥州岩城におはす内藤左京亮殿の御内磯江吉左衛門勝盛もとより狂をこせらる巳前林和泉もちて愚句とも見たきとの給しハ何やらん集作らんためにとの断也是即左京亮殿の仰せとて也けふの返事しつ撰集のさま新犬つくは作りし心はへなといひやりつ

この記事の内容について、岡田利兵衛氏は「『何やらん集』は『夜ノ錦』を指すか。『新続犬筑波集』は前年の万治三年であるから、その編集ぶりを教へたものと思ふ」と述べておられる。

翌寛文二年に、西山宗因が岩城入りをした。宗因の『松島一見記』（松島紀行）には、風虎との交遊のありさまを記している。この前後から、風虎の第一撰集『夜の錦』の編集が具体化したらしいことは、さきの『季吟日記』に徴しても明らかであろう。宗因は自分の代理として、門下の松山孜也を、風虎のもとへ派遣した。孜

也は、風虎とほぼ同じ年令（註5）で、趣味もよく一致し風虎の信頼を得たようである。彼は、寛文四年から六年にかけて、三年間岩城に滞在し、風虎の撰集事業を助けた。玖也は、こののち寛文八年と十二年にも岩城へ下り、風虎のそばにあって、第二撰集『桜川』の編集を助けたが、そのことは次項に述べる。

寛文六年成立の『夜の錦』は、原本が現存しないので惜しまれるが、さいわい桑折宗臣編『詞林金玉集』（延宝七年成立）の中に、一〇四一句が抜萃して載せられている（註6）。不完全なかたちの抄出本とはいえ、これだけでも優に一冊の句集として充分な分量である。さらに水間沾徳編『俳林一字幽蘭集』（元禄五年刊）にも、『夜の錦』から六五句を収録している。これらによって、形成期の風虎サロンの様相を、ある程度まで推察することが可能となるであろう。

詞林金玉集所収『夜の錦』は、句数一〇四一句、作者三四七名であるが、このうち『桜川』と共通する作者は一四三名（註7）である。差引き二〇四名は、『夜の錦』に入集しながら『桜川』に入集しない作者である。この中には、当時まだ無名であった芭蕉と松尾宗房一句、桃青三句もふくまれている（註8）。

『夜の錦』（寛文六年）から『桜川』（延宝二年）まで八年間にあるいは死んで脱落した者もあるであろう。佳句を生むに至らなかった者、創作活動を止めてしまった者もあるであろう。ともかく事情はさまざまであろうが、これらは概ね、五句か三句あるいは一句といった少数入集者であって、いわゆる風虎サロンの主要人物ではないと思われる。

では、この時期に風虎サロンの中核を形成していた主要人物は、どんな人々であったか。『夜の錦』は原本が現存しないのであるから、その片鱗をとどめている僅かな資料をも充分に活用しなくてはなるまい。詞林金玉集所収『夜の錦』の句数によって、五句以上収録されている作者をあげてみると、次の四八名である（第一表）。

（第一表）

43	内藤	風虎	（岩城）	○
40	松山	玖也	（大坂）	○
40	橋本	冨長	（京）	○
23	伊勢村	重安	（大坂）	○
21	浜田	春良	（大坂）	○
19	松賀	紫鹽	（岩城）	○
18	江口	鹽言	（二本松）	○
16	木村	調和	（江戸）	○
16	長岡	道高	（二本松）	○
16	水野	林元	（二本松）	○
15	西山	梅翁	（大坂）	○
14	松江	維舟	（京）	○
14	梶山	宗吾	（大坂）	○
13	伊勢村	意朔	（大坂）	○
13	長坂	守常	（岩城）	○
13	武野	俊佐	（大坂）	○
13	塩川	如白	（岩城）	○
12	北村	季吟	（京）	○
12	松村	吟松	（江戸）	○
12	小野	恩侍	（吉田）	○
12	阿形	倶重	（大坂）	○
10	日野	好元	（二本松）	○
10	松江	宗帆	（京）	○
9	半井	一六	（二本松）	○
9	大坂住	一芥	（大坂）	×
9	杉野	雨云	（白河）	×
9	高島	玄札	（江戸）	○
9	大坂住	不醒	（大坂）	×
7	榎並	一葉	（摂州）	○
7	斎藤	親盛	（二本松）	○
6	浜田	春倫	（大坂）	○
6	井口	如貞	（大坂）	○
6	山川	正永	（江州）	×
6	井上	宗恒	（大坂）	○
6	林	宗甫	（郡山）	○
6	神野	忠知	（江戸）	○
6	南	方由	（堺）	○
6	斎藤	有我	（二本松）	○
5	片山	安之	（江戸）	○
5	荻野	安静	（京）	×
5	西田	久任	（大坂）	×
5	赤塚	資仲	（江戸）	○
5	釈	秀長	（江戸）	×
5	畑山	勝之	（堺）	×
5	磯江	勝盛	（岩城）	○
5	釈	任口	（伏見）	○
5	石田	未得	（江戸）	○
5	高井	立志	（江戸）	○

このような機械的方法は、まことに安易で不正確だという批判がおこるかもしれない。たしかに第一表に示した句数は、あくまでも抄出本の句数であるから、原本収録句数と異ることは、じゅうぶん頭に入れておかなくてはならない。しかし、原本収録句数は、抄出本の句数よりふえることはあっても、減ることはないのである。つまり第一表の句数は、「少くともこれだけは入集している」という数値を示しているわけである。

これらの顔ぶれを見ると、この時期における風虎サロンの様相の一面が知られるであろう。まず風虎四三句、玖也・冨長各四〇句、つづいて重安・春良といった大坂勢、紫鹿・鹿言ら奥州勢が並んでいる。全体的に大坂が多いのは、松山玖也が実質的に編集主任として尽力した結果のあらわれであろう。大別すると、一つは宗因（梅翁）・維舟・季吟とそれらにつながる上方系俳人たち。一つは風虎を棟梁といただく岩城・二本松などの奥州系俳人たちである。この二元的傾向は、次の『桜川』においても、依然として顕著な現象である。これら『夜の錦』の主要作者と見られる人々の多くが、引きつづき『桜川』に健在であることは、たとえば、両書に共通する作者（○）、『夜の錦』のみに出る作者（×）と類別してみると、第一表において○が四〇人、×が八人であり、しかも上位のほとんどは○であるという傾向によっても明らかであろう。

なお江戸貞門の古老である未得や玄札に加えて、調和・忠知・立志らをも厚遇しているのは注目すべきである。未得・玄札は『御点取俳諧百類集』の点者であったから、風虎との関係は古いことがわかる。木村（岸本）調和は、この寛文頃すでに新進の実力者として次第に頭角をあらわしはじめ、のち延宝年間には「江戸で最大の勢力を擁し、芭蕉一派を凌いでいた」（俳諧大辞典）のであるが、調和は権門に近づくことにより大量の門人を獲得したと考えられる（註9）。されば調和にとって、風虎サロンは最もよい目的物の一つであったに違いない。白炭の名句で知られる神野忠知も、早くから風虎サロンの一員であったらしく、のち『桜川』に五十六句入集するほか、『奥州名所百番俳諧発句合』（寛文十二年）や『六百番俳諧発句合』（延宝五年）にも加わっているが、その『六百番俳諧発句合』の成立をまたず延宝四年に没した。

風虎サロンも、江戸を舞台とする第三期になると、上方系俳人の活躍が目ざましくなり、逆に江戸貞門の蝶々子・不卜・調和や、江戸談林の松意らは締め出されるのであるが（註10）、第一期・第二期のころは、まだそうした極端な排他的性格はあらわれていない。少くとも『夜の錦』『桜川』入集の顔ぶれによれば、そうした傾向は見られないのであって、多種多様な作者層を包括したおおらかさこそ特色といえるのであった。

風虎サロンは、この第一期において、基本的な性格がほぼ形成されたと言えるであろう。すなわちサロンの中心には風虎とその家臣らのとりまき連衆があって、一団を形成していた。風虎は、先進の上方俳壇中でも第一流の維舟・宗因・季吟たちを指導者と仰ぎ、彼らと密接な連絡をとったり、はるばる岩城へ呼び寄せたりして、サロンに活気をもたらした。それは、風虎という文学愛好の大名ならでは出来ない、ぜいたくな風流事であった。この間にあっては玖也は、風虎の『夜の錦』撰集を助けつつ、風虎サロンと上方俳壇との連絡をはかり、かねて風虎の相手役としてサロンの運営にも意を用いたと思われる。

三　風虎サロンの充実

風虎サロンの第二期は、寛文七年から延宝二年まで（風虎四十九歳から五十六歳まで）の八年間とする。この時期の特記すべき事項は、風虎を中心としてたびたび句合がおこなわれたこと、風虎の第二撰集『桜川』が成立したこと、などである。

まず、句合の問題について述べる。岡田利兵衛氏は、風虎が句合を好んだことについて「これは先人の歌合の感化であろうが、風虎の成績が優れていたので、一層拍車をかけることとなった。しかしこの企画が多い点から見て、彼の俳諧態度が厳粛な芸術としてよりも、軽い遊戯的なものであったことは否めないようである」と言っておられる。妥当な見解と思われる。まことに句合は、真剣な文学というよりも、楽しみの要素を多く加えたあそびとして、サロンには格好の種目だったわけである。

風虎サロンに句合をとりいれたのは、まず維舟であったらしい。現存する最も初期の作品は維舟判の『四十番俳諧合』（寛文五年一一月）で、維舟はちょうど風虎に招かれて岩城に滞在中であった。この句合に松江宗畏が加わっているところを見ると、維舟は、この岩城下向に、同族の宗岷を伴っていたらしい（註11）。内藤風虎・磯江勝盛・松賀紫瓌・塩川如白・山本武純といった地元サロンの常連に、岩城で二年目の冬を迎える松山玖也も加わっておこなわれた。左右連衆の衆議判によって勝負が決められているところから見て、これら八人の作者は、一堂に会し膝つきあわせて、この催しに與じたことと推測される。

右の『四十番俳諧合』は、この小論の区分にしたがえば、風虎サロンの第一期に属する作品であるが、以下、第二期に入って多数の句合が催されている。判者をつとめたのは、主として季吟と玖也とであった。季吟判の句合には『七十番俳諧合』（寛文七年以前）、『二百番俳諧発句合』（寛文七・八年頃）『百五十番俳諧発句合』（寛文九年）があった。季吟は、直接それらの句合の場に居あわせて判定した形跡はないが、判詞を依頼されるごとに、れいの流麗な文字で清書し、風虎に献上した。天理図書館蔵の『百五十番俳諧発句合』は、その代表的なものである。また玖也判の句合には『百番俳諧発句合』（寛文九年）、『奥州名所百番俳諧発句合』（寛文十二年）などがある。玖也はつねに近侍していたので、風虎から句合の判者を仰せつかる機会も多かったのであろう。

風虎主催の句合に選ばれる作者は、主として風虎とりまきの家臣俳士たちか、京・大坂の高名な俳人たちであって、彼らの大部分は風虎編『桜川』に入集し、また風虎主催のいくつかの句合に重ねて選ばれる傾向があった。たとえば、季吟判『百五十番俳諧発句合』では、作者三〇人のうち二八人までが『桜川』入集者であり、玖也判『奥州名所百番俳諧発句合』の作者二〇人のごときは、二〇人すべてが『桜川』入集者であった（註12）。そこには、風虎サロンの縮約された姿が見られる。

この第二期の総決算として編集されたのが、『桜川』であった。『桜川』は「寛文十二年正月三日洛下季吟書」という序をもつが、成稿は、松山玖也の跋により「延宝二甲寅年五月仲旬」であった。

『桜川』編集の由来について、跋にしるすところを要約すると、次のようである。―『夜の錦』成立後、各地から集まる句がなお跡絶えぬ有様なので、再募集して一万句をこえる数となった。これ

らを、古書百二十七部に照らして等類同意の句などを除き、七〇三六句（実際には七〇七句）とした、云々。玖也はさらにことばをついで「いにしへより連俳の書、九の牛の汗すべきまでおほかれど、かくねもごろなるたぐひやはある」と大見得をきった。ひとつには風虎の撰集をたたえるためであったが、またひとつには、永年編集の任にあたったみずからの労をねぎらう気持もこめられていたであろう。ともあれ、この『桜川』によって、われわれは風虎サロンの充実ぶりを、うかがい知ることができるのである。

玖也は、集中最多数の四五二句を入集し、続いて風虎三一三句、冨長二二一句、維舟二〇六句などである。これらの顔ぶれは、さきにも指摘したとおり、多く『夜の錦』主要作者と共通する。ちなみに『桜川』に三〇句以上入集する作者をあげると、次の五〇人である。（第二表）

（第二表）

452	松山　玖也	（大　坂）	○
313	風　　虎	（岩　城）	○
221	橋本　富長	（　京　）	○
206	松江　維舟	（　京　）	○
201	水野　林元	（二本松）	○
185	日野　好元	（二本松）	○
181	松賀　紫鹽	（岩　城）	○
152	長坂　守常	（岩　城）	○
149	塩川　如白	（岩　城）	○
139	北村　季吟	（　京　）	○
120	浅香　研思	（岩　城）	×
118	小沢　衆下	（二本松）	○
108	江口　鹽言	（二本松）	○
91	椋梨　一雪	（　京　）	○
89	矢吹　嘉品	（岩　城）	×
87	吉田　聞也	（岩　城）	×
81	高滝　以仙	（大　坂）	×
80	内藤　未及	（二本松）	×
78	釈　　任口	（伏　見）	○
74	川路　繁常	（岩　城）	○
70	中井　正成	（二本松）	○
66	斎藤　如酔	（二本松）	○
63	柏木万年子	（江　戸）	×
61	須田　東竹	（江　戸）	×
60	小西　似春	（　京　）	×
56	野間　政安	（朝熊岳）	○
56	神野　忠知	（江　戸）	○
53	北村　湖春	（　京　）	○
52	吉岡　信元	（福　山）	×
51	須藤　之也	（二本松）	×
51	武野　保俊	（大　坂）	○
49	山井　概武	（岩　城）	×
45	露　　沾	（岩　城）	×
44	高野　幽山	（　京　）	×
43	下河部咽昔	（二本松）	×
43	宮内　友也	（大　坂）	×
42	加藤　治尚	（岩　城）	○
40	斎藤　親盛	（二本松）	○
40	松村　吟松	（江　戸）	○
39	小池　又笑	（二本松）	○
38	児玉　久友	（岩　城）	×
38	磯江　勝盛	（岩　城）	○
37	坂倉　吉頼	（竹　鼻）	×
35	太田　可政	（竹　鼻）	×
35	延沢破扇子	（熱　田）	○
34	西山　梅翁	（大　坂）	○
33	尼崎住野夫	（尼　崎）	×
33	岡部　任幸	（吉　田）	○
32	藤田　清俊	（岩　城）	×
31	高橋　因元	（金　沢）	×

『桜川』の作者はすべて八一五人、句数七〇三六句（句引）であるが、右の上位五〇人の句数合計は四四九五句となり、これだけで既に全句数の六二%を占めてしまう割合となる。上位入集者の占める比重は、きわめて大きいのである。

また、これを住国別にしてみると、

岩　城	一四人	二本松	一一人	江　戸	四人
京	七人	大　坂	五人	その他	九人

となり、岩城・二本松の作者群が圧倒的に多いことが知られる。京・大坂は上位入集者数がやや少い感があるが、全体的に見ると、京一〇八人、大坂八五人で、作者層は岩城七〇人・二本松四五人よりも広い。

右表にあげた上位五〇人のうち、『夜の錦』抄出本にのる者○印二九人、のらない者×印二一人となり、両書に共通する作者が多いことは明らかである。×印のうち何人かは、『夜の錦』原本が出現すれば○印になる可能性があり、そうすれば○印の占める割合は、いっそう大きくなることが推定される。

これらのうち、二二一句を入集した橋本富長は、『夜の錦』に四〇句以上入集したほか、『百五十番誹諧発句合』や『奉納于飯野八幡宮ノ発句』にも出句し、風虎サロンの有力な一員であったが、寛文九年十一月以前に死去した。維舟や塵言が『桜川』に追悼句を寄せていることによって知られる（註13）。翌寛文十年三月には、磯江勝盛が死去した。勝盛は、かつて風虎の命をうけて季吟に手紙を書いた人物で（121頁参照）、『四十番俳諧合』いらい古くからの常連であった。こうした古い連衆が去るのと入れかわりに、新しい連衆（たとえば、風虎の第二子露沾は十五歳で『奉納于飯野八幡宮ノ発句』に初見、『桜川』には四十五句入集）が加わって、風虎サロンの構成メンバーが少しずつ変わっていくということはあった。しかし、サロンの基本的性格は、あくまで第一期の延長線上にあったのである。

次に『桜川』の中から若干の句をあげて、この時期の風虎とそれをとりまく俳人たちの交遊のありさまを見ておきたい。

寛文十年十二月に、五十二歳の風虎は、内藤家六代当主として、家督を相続した。岩城の斎藤如白、京の松江維舟、それに北村季吟・湖春父子らが、さっそく祝賀の句を送ったが（註14）、その中に

去御方の御家督を祝ひ奉りて

（六九八三）　すゑさかへ行としの賀や御家督　門村兼豊

の句もあった。兼豊は風虎サロンの一員であったが、ほんらい江戸貞門で名を知られた存在であり、調和とも親交があった（註15）。

年頭の文、あづまへつかはすとて

（四七七）　春やとき礼やをそしと申状　西山梅翁

と、風虎のもとへ発句をもって年賀の挨拶をよこす者もあり、

去御方より、歳暮の句御所望の時、書付侍る

（六九九二）　むねやせはさ哥袋さへとしのくれ　小野愚侍

と、歳暮に風虎のほうから発句を所望したこともあった。愚侍は三州吉田住で、すでに『夜の錦』に十二句以上入集しており、古くから風虎サロンとのつながりをもっているが、近年、仮名草子『ねごと草』の作者として注目をあびている（註16）。

或御方にて御所望

（一七三一）　上の句や身は下ながら花の陰　松村吟松

これは風虎が花見に招いたときの句であろう。吟松は江戸住なのでこの花見は江戸の風虎邸において催されたものか。

みちのく岩城にて月見侍るにくもりければ

（四八四九）　あの関の名こそおしけれけふの月　中畑乍憚

これは風虎が月見に招いたときの句と推定するが、乍憚とは相楽等躬のことである。彼は岩城に近い須賀川の住で、『桜川』に十二句入集するところから見ても、風虎と何らかの交渉があったらしく考えられる。ちなみに「等躬は晩年岩城露沾公に召された」（註17）というが、それは晩年になって生じた新しい関係ではなく、すでに寛文ごろから風虎の知遇を得ていたため、その旧縁によって露沾に召されたものと考えたい。等躬は、前述の調和と親しく、いっぽう桃青（芭蕉）との関係も知られて興味ぶかい人物であるが、等躬と桃青との交渉が、あるいは風虎サロンを媒介として始まったのではないかという感じもするので、蛇足を加えておく次第である。

四　風虎サロンの発展と分裂

風虎サロンの第三期は、延宝三年から延宝八年まで（風虎五十七

歳から六十二歳まで）の六年間とする。この時期の特記すべき事項は、サロンの中心が江戸にうつり、それにともなって若い世代の俳人群が抬頭してきたこと、風虎の第三撰集『信太の浮島』や『六百番俳諧発句合』等の大作があいついで成立したこと、などである。

「風虎の江戸における上屋敷は、今の虎の門附近で、江戸地図によると城濠に近い溜池添いに在った。下屋敷も六本木であった」（註18）。晴れた日には富士も見えて、眺めがよかったらしい。

江戸溜池の辺より富士を見て

（一〇元）　溜池にうつるや富士の雪なだれ　　風山（風虎の別号）

江戸の風虎邸には、若い俳人たちが出入りするようになった。そうして、これが江戸俳壇において一派を形成し、次第に勢力をもってくることになる。風虎のもとに集まった若い俳人たちは、すべて京都の貞門系で、たとえば維舟門の高野幽山や、季吟門の小西似春が中心人物と考えられる。同じく季吟門の山口信章（素堂）・松尾桃青（芭蕉）、さらに池西言水（維舟門か）らがその周辺にあった。江戸における風虎サロンが、どのようなかたちで、いつごろから形成されつつあったかを、私はいま詳らかにしえないが、右の幽山・似春が江戸に移住する寛文末年から延宝初年にかけての頃、と考えてよかろうか。すなわち『桜川』の成立とあい前後する時期にあたるわけである。両人とも『桜川』句引にはまだ「京住」となっており、延宝三年には江戸でその名をあらわしはじめる。

この延宝三年には、西山宗因が、風虎の招きに応じて江戸へやってきた（註19）。宗因は、このとき風虎邸に滞在したので、ここに出入りを許されていた幽山・似春らは、風虎やその家臣俳士にまじって、宗因と一座する機会を持った。これを契機として、江戸の地に談林風が大いに広まり、風虎の周辺は、にわかに活気をおびてくる。

いっぽう、同じく宗因から激励の一句をうけて花やかな活動を始める田代松意ら『談林十百韻』の一派がある。宗因の東下を契機として活潑な活動をはじめたこれら二つの俳人グループのほかに、歴史的な地盤をもつ古風の一団―神田蝶々子・岡村不卜・岸本調和らが隠然たる勢力をもって存在している。延宝年間の江戸俳壇は、こうして三つ巴の戦いをくりひろげ、めざましい発展をとげるのである。もちろん、古風は新興勢力に押され、江戸は談林旋風の吹きまくる巷と化す。こうしてみると、宗因を招いて江戸談林の盛行の契機をつくったのは、ほかならぬ風虎だったわけであるから、その功は大いに賞讃すべきところであるが、風虎はもとより江戸俳壇の発展などを意図したわけではなく、単なる個人的要請で招いたに過ぎなかった。この偶然の一事が、はからずも江戸俳壇ぜんたいに幸運をもたらしたといえる。

延宝初年の江戸俳壇は、まだきわめて小さな存在でしかないが、延宝三年以後の数年間に見せる発展は、驚くべきものである。この数年間において、俳人の活動状況も、出板俳書数も、京・大坂の先進両俳壇に追いつき、延宝六・七年のころには完全に三都鼎立のかたちとなる（註20）。その中から、やがて芭蕉を生み、江戸俳壇の位置は確固たるものとなっていくのであるが、そうした過程にあって、混乱の中にも活気にみちた俳壇の様相を見つめることは、まことに興味ぶかいのである。

右の数年間に、風虎サロンが果した役割は大きい。延宝の初年ごろグループを形成した幽山・似春の一派は、京都からやってきて、江戸俳壇の第三勢力として入りこんだのである。右には古風の一団

が隠然たる勢力をもち、左には急先鋒のかたまり『談林十百韻』の一派がたむろしている江戸俳壇において、京都貞門系の幽山・似春一派は、貞門から談林への移行を示し、穏健なる進歩主義の立場をとった。この第三勢力が江戸俳壇の主導権を容易に得ることができた背後に、風虎サロンが重要な役割を演じたことは、今栄蔵氏の「談林俳諧史」などで既に定説となった観がある。

しかし、これまでやや等閑視されていたことであるが、風虎サロンと幽山・似春らの関係をこまかく見ていくと、年とともに変化していくことに気づく。延宝三年から五年にかけては、まだ幽山・似春一派が、風虎サロンの恩恵を充分にうけ、その枠の中で活動しているにすぎないが、延宝六年にいたって彼らは風虎サロンの枠を破り、新しい活動の段階に入ったと見られる。

この年「午三月下旬」の日付で出板された幽山編『江戸八百韻』が、幽山の江戸俳壇進出の第一作であったことは、いうまでもないであろう。幽山がここに結集した新勢力は、安昌・来雪・青雲・言水・如流・一鉄・泰徳で、風虎サロンの来雪・言水はともかく、談林から転向した一鉄まで加えたその顔ぶれは、おおむね寄せ集めというべき性格であった。『江戸八百韻』は一般に「俳風革新の第一声を挙げたもの」（俳諧大辞典）と評価されているが、私見によれば、幽山のめざした「俳風革新」は必ずしも成功していない（註21）。むしろ、幽山が風虎サロンの枠から一歩ふみ出し、（出板活動をすること自体が、すでに風虎サロンの性格から逸脱している）独立した活動を始める点にこそ、より大きな意義を認めるべきではあるまいか。

それにしても、幽山一派の有力なメンバーと見られる似春・桃青が『江戸八百韻』に加わらなかったことは、早くもこの一派の結束が乱れはじめたことを予測させるし、一方には江戸貞門の根づよい地盤もあって、幽山一派の前途にはきびしいものがあったようである。幽山はすでに寛文頃から調和と結び、天和・貞享年間にいたるまで不即不離の状態を保っているが、これはどのような事情によるものか明らかでない（註22）。

こうした新らしい情勢にはあまり煩わされることなく、風虎の第三撰集『信太の浮島』の編集は進められていたのであろう。成立は延宝五年以後と推定されるが、現存しないので、その内容を検討できないのが残念である。延宝五年風虎主催の『六百番俳諧発句合』は、都鄙の作者六十人を動員した最大規模の句合で、判者をつとめた任口・季吟・維舟は、いずれも風虎サロンの古くからの常連であった。作者六十人のうち、『桜川』に入集するものは四十人あり、第二期からひきつづき風虎サロンに健在する作者が多いが、しかし一方、『桜川』に入集していなかった無名の作者群が、この数年間のうちに風虎サロンとつながりを持ったことは、注目すべき現象であった。翌延宝六年に、風虎はめでたく還暦を迎えた。それを記念して『五百番自句合』を編み、釈任口に判詞を書かせた。ときに任口は七十三歳の老齢であったが、この厖大な句合の判詞を一身にひきうけ、みごとにその大任をはたしたのである。

これら一連の大撰集が成立した延宝中期の数年間は、風虎にとって作品の集大成の時期であったが、実質的に風虎サロンを支えていたのは、風虎とりまきの家臣など概ね老齢者や無名俳人であって、サロンは次第に江戸俳壇の動きと没交渉になっていったらしく推測される。幽山一派の実力をつけた若い俳人たちが、延宝中期にめざ

ましい活動をすることは、今栄蔵氏の「談林俳諧史」によって明らかであるが、その時期の幽山一派は、すでに風虎サロンを支える存在ではない。

風虎サロンにも、おのずから消長がある。延宝四年に玖也（五十五～九歳位）が没したのをはじめとして、延宝八年には維舟（七十九歳）が、翌々天和二年には宗因（七十八歳）が、あいついで没し、風虎は有力なブレインを失うことになる。いっぽう、実質的な活動の中心となるべき幽山一派は、すでに述べたように延宝五・六年のころから、風虎サロンの枠をこえて幅ひろい創作活動を展開するが、幽山は桃青と不和をおこしたように見えるし、また幽山と似春のあいだも、それに近いものがあったのではないかと推測させられる（註23）。彼らはすでに充分な実力をそなえ、独力でも活躍することのできる状態であった。幽山一派にあっては、発展することが同時に分裂をひきおこす原因となった。俳壇においては、貞門・談林の論戦がはげしさを増し、混乱状態を呈する時期である。風虎の創作態度から見て、このような状態は、彼の資質にそぐわないものがあったであろう。風虎サロンの役割は、このあたりでほぼ終わるのである。

いっぽう、露沾の動きは、父風虎とやや異った傾向を見せている。たとえば、延宝六・七年にあいついで出板された言水編『江戸新道』、不卜編『江戸広小路』、千春編『仮舞台』（註24）がいずれも巻頭に露沾の句をいただいていたのは、単なる偶然の一致ではなかったはずで、そこには、新しい時代の代表者として江戸俳壇に迎え入れられた露沾の位置が、きわめて象徴的にあらわされていた。

五　風虎サロンの崩壊

風虎サロンの第四期は、天和元年から貞享二年まで（風虎六十三歳から六十七歳、没まで）の五年間とする。この時期においては、もはや風虎の活動に見るべきものはない。「風虎の句作が天和以後急に減退したのは重頼（維舟）の死と関係があらう」とする岡田利兵衛氏のとらえ方は的確である。すでに俳壇ぜんたいが、創作活動のゆきづまりにより極度の低迷を続ける、暗黒の谷間の時代であった。

天和二年二月、内藤家には一つの重大な事件がおこった。それは二十八歳の露沾が、突如として（註25）疾の故をもって退身し、家督を弟義孝にゆずったことである。その原因として岡田利兵衛氏は一、露沾と義孝が異母兄弟であったこと。二、風虎と露沾は「御父子ノ間不和ヲ生ジ」（『内藤家旧記』）たらしく、延宝五年に、風虎は露沾に家訓を与えている。三、家老松賀族之助こと紫塵の陰謀事件にまきこまれたのではないか。の三つの点を推定しておられる。家老の紫塵が、何くわぬ顔で俳諧のお相手をしながら、じつは主家簒奪を企んでいたとは、風虎サロンにとって思いがけない暗雲であった。退身した露沾は、赤坂溜池の邸から麻布六本木に移った。以後、この露沾邸が、風虎サロンにとってかわることになるのである。

六　おわりに

風虎サロンの前期と後期とのあいだには、大きな変化が見られたが、それは活動の中心となるべき人物の大幅な交替によるものであった。すなわち、松江維舟・北村季吟・西山宗因・松山玖也らの時期から、高野幽山・小西似春・松尾桃青・池西言水らの活躍する時

期へと移っていくのである。しかも、この勢力交替によって、風虎サロンの性格は、蹂つきあわせて楽しむ閉鎖的な「なぐさみ」の集団から、一変して、江戸俳壇の主流を形成すべき体制へと、うつりかわっていくのである。

しかし、この変化によって、風虎サロンは、安泰するどころか、むしろ逆に、分裂と崩壊の危険にさらされる結果となった。幽山・似春・桃青・言水らのあいだには、感情的にしっくりいかない面でもあったかと推測される。自力で新風を開拓しようと意気ごんだ彼らは、めいめいが独立して、活動をはじめるのである。

結論的に言って、私は、今栄蔵氏の「（風虎邸を背景にした）この一団はかくていよいよ精彩を増していったのである」（談林俳諧史）という見方に、同調しきれないのである。むしろ逆に、風虎サロンの分裂と崩壊の過程をとおして、蕉風樹立を把握すべきではないか、という見方をとるのである。

風虎サロンが作りえたもの、それは、貞門・談林をあわせ呑んだいかにも大名らしいおおらかな雰囲気であった。京都貞門派が江戸俳壇に進出し、やがて主導権を獲得していく一つの拠点として、また芭蕉の文学を育成した温床としての役割は、大きく評価してよいと思われる。

（昭和四二年三月二〇日稿）

註1　今栄蔵氏「談林俳諧史」（明治書院版『俳句講座1』、昭和三四年七月）鈴木勝忠氏「談林」（国文学、昭和三九年六月）

2　原本大東急記念文庫蔵。翻刻『桜川』（昭和三五年一二月）。

3　岡田利兵衛氏「内藤風虎・内藤露沾」（明治書院版『俳句講座2』、昭和三三年一一月）一六二頁。

4　原本京都市新玉津島神社蔵。俳書叢刊（昭和三一年四月）。

5　岡田利兵衛氏「松山玖也東下り富士一見記」（国語国文、昭和二八年四月）に、玖也の没年を延宝四年四月、五十五歳から五十九歳の間と考証し、『俳諧大辞典』もこの説をうけている。風虎は延宝四年に五十八歳であるから、玖也とほぼ同じ年令といえる。ちなみに「桜川覚書」には寛文六年五十一歳（延宝四年六十一歳没）とするが、これは『桜川』所収句に付された日付の解釈を誤まっている。

6　板坂元氏「複刻夜の錦」（近世文芸一～三号に連載、昭和二九年一〇月、三〇年一〇月、三一年五月）。板坂元氏「詞林金玉集について」（連歌俳諧研究五、昭和二八年一〇月）。

7　拙稿「内藤風虎『桜川』作者索引」（近世文芸稿八、昭和三八年六月）。拙稿「詞林金玉集所収『夜の錦』作者索引」（近世文芸稿一〇、昭和四一年七月）による。

8　板坂元氏「複刻夜の錦」（近世文芸一）の解題にいう。――芭蕉の句が寛文六年撰の「夜の錦」にあって、同十二年の「桜川」に見出されないのは、主君蟬吟に先立たれた摸索期でもあったのだろうか。

9　荻野清氏「俳人岸本調和の一生」（国語国文、昭和一〇年四月）にいう。――惟ふに、調和は人一倍社交性に富んでゐたと思はれ、是こそ彼をして江戸に於ける最大の勢力家たらしめるもっとも有力な原因ではなかったらうか。彼が最善とした門人獲得の法は、権門への接近だったらしい。

10　今栄蔵氏「談林俳諧史」。尾形仂氏「蕉風俳諧史」（ともに明治書院版『俳句講座1』所収）。

11 杉浦正一郎氏『芭蕉研究』（昭和三三年九月）三七七頁。

12 拙稿「内藤風虎主催句合考並作者索引」（近世文芸稿一一、昭和四二年一月）。

13 橋本富長追悼（あるいは追善）の詞書は、『桜川』の五八四・六三五・六三四にある。また磯江勝盛追悼の詞書は、同じく三七二にある。ほかに勝盛追善独吟百韻（維舟）も知られている。

14 風虎の家督相続を祝した詞書は、『桜川』の一三・一三七・五九二・六九二にある（季吟・湖春・維舟・如白）。季吟父子の句は春季なので、翌年春になって風虎家督を知り祝賀句を送ったものか。

15 『桜川』三九四、「門村兼盟あいさつに」の詞書をもつ木村（岸本）調和の発句がある。

16 岸得蔵氏「ねどと草と小野愚侍」（国語国文、昭和三九年一一月）。

17 荻野清氏「須賀川の等躬」（『芭蕉論考』昭和二四年四月）

18 三浅勇吉氏『桜川』覚書（大東急記念文庫『桜川』所収、昭和三五年一二月）二六頁。

19 板坂元氏「西山宗因研究―延宝三年の東下をめぐって―」（国語と国文学、昭和二八年三月）。

20 今栄蔵氏「談林俳諧史」（前出）。米谷巌氏「延宝六年における三都の俳壇の動向」（広島県可部高校研究紀要創刊号、昭和三七年三月）。

21 拙稿「芭蕉論序説―延宝期の桃青に関する考察―」（国語教育論考二、昭和四〇年五月）。

22 幽山編『誹枕』（延宝八年）に調和の発句七を入集するが、同書の出板事情を考えあわせると、これらの中には寛文年間の作品が多くふくまれている筈である。いつぽう幽山の発句は、調和編『富士石』（延宝七年）に七句、『俳諧金剛砂』（延宝末年）に二句、『題林一句』（天和三年）には入集せず、『俳諧一星』（貞享二年）に発句二、付句一を入集している。

23 阿辻見知子氏「芭蕉の周辺―幽山と似春と芭蕉との関係をめぐって―」（語文九、昭和三五年六月）。なお拙稿「芭蕉論序説―延宝期の桃青に関する考察―」（前出）で、幽山と芭蕉の不和について、少したちいった考察をしたことがある。

24 『仮舞台』の原本は知られないが、阿誰軒の俳書目に、

かり舞台　延宝七年三月　江戸八歌仙　千春作

巻頭　かり舞台盤役者なり花の山　露沾

とあるのによって、延宝七年成立、巻頭句は露沾と知られる。

25 岡田利兵衛氏は「突如として」という表現をしておられる。外見上は、いかにも突然の出来事だったのであろう。しかし、風虎・露沾父子の不和が、すでに前々からあったことは、岡田氏のあげられた理由の二によって明らかである。風虎が露沾に家訓を与えたのは延宝五年であるが、私はこれよりさらに約五年さかのぼって、寛文末・延宝初年のころに、すでに不和の徴候があらわれることを指摘しておきたい。それは『桜川』一三一三の句に、

父子不和をなをし侍りて　呉竹のふしの中よし雀の子　松山玖也

とある詞書による。

――広島大学助手――